様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 4 月　20 日現在

機関番号：３３１０４
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９５２０２７０
研究課題名（和文）　新約聖書におけるヘレニズム・ユダヤ人キリスト教書簡文学の修辞学的研究
研究課題名（英文）　Rhetorical Studies on the Hellenistic Jewish Christian Epistolary Literature in the New Testament
研究代表者
山田　耕太　（YAMADA　KOTA）
敬和学園大学・人文学部・教授
研究者番号：５０２４００１５

研究成果の概要（和文）：ヘレニズム・ローマ時代におけるパイデイアと修辞学の研究、とりわけフィロンにおけるパイデイア・修辞学・哲学の研究に基づいて、新約聖書のヘレニズム・ユダヤ人キリスト教書簡文学と位置づけたヘブライ書やヤコブ書の修辞学的分析を押し進めて、その文学的構造と神学的思想を解明することに努めた。

研究成果の概要（英文）：This project is based on the studies of paideia and rhetorical education in the Hellenistic-Roman period, particularly those of Philo on his paideia, rhetoric and philosophy, I tried to analyse the Hellenistic Jewish Christian epistolary literature, the Hebrews and the James, in terms of rhetorical criticism, in order to understand their literary structure and theological thought.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	400,000	120,000	520,000
２００８年度	400,000	120,000	520,000
２００９年度	400,000	120,000	520,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：新約聖書学
科研費の分科・細目：人文学・文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：西洋古典、新約聖書、修辞学的批評、書簡文学

１．研究開始当初の背景

1991 年度以来、本研究代表者は新約聖書のルカ文書とパウロ書簡の修辞学的批評に取り組んできた。1999-2001 年度には科学研究費補助金萌芽的研究「パウロ書簡における書簡理論的・修辞学的研究」（個人研究）で第二コリント書の修辞学的研究に取り組んだ。その研究成果の 7 論文（内 2 論文は英訳して海外で発表したもの）をまとめて『パウロ書簡における書簡理論的・修辞学的研究：科研費報告書』（オリオン印刷、2001 年 12 月）として印刷し、内外の研究者に配布した。

また、この研究成果を中核に据えて、それ以前に行なったルカ文書の修辞学的研究の論文とその他の論文を加えて、ルカ文書と第二コリント書を対象にした主として修辞学的批評による 15 論文をまとめて、『新約聖書と修辞学：ルカ文書とパウロ書簡の修辞学的・文学的研究』（日本聖書学研究所創立 50 周年記念双書、キリスト教図書出版社、2008 年）として出版し、研究成果を公表した

本課題研究は、上述の研究成果を土台にして、新約聖書の書簡文学全体に研究領域を広げて、修辞学的批評を展開していくことを目指した。

２．研究の目的

本研究では、「ヘレニズム異邦人キリスト

教文書」のパウロ書簡とは異なってユダヤ教的背景がより強い文書を「ヘレニズム・ユダヤ人キリスト教文書」というカテゴリーでまとめることにした。

パウロ以後に書かれた新約聖書の後期の書簡文学で、「ヘレニズム・ユダヤ人キリスト教書簡文学」の文学的構造と神学議論を明らかにするために従来とは異なる新しい視点で修辞学的批評を試みることにある。

３．研究の方法

（１）研究全体への導入として「ヘレニズム・ローマ時代のパイデイアと修辞学の教育」について研究を行なった。

（２）紀元 1 世紀前半にギリシア・ローマの修辞学と哲学を用いて旧約聖書を註解したアレクサンドリアのフィロンの思想と実践に通じる必要があり、その序論的フィロン研究というグランドワークを行なった。

（３）19 世紀末から 21 世紀初頭までの福音書研究史ならびに書簡研究史を修辞学的批評という新たな視点から概観し、再評価した。

（４）「ヘレニズム・ユダヤ人キリスト教書簡文学」と「ヘレニズム・異邦人キリスト教書簡文学」の比較の意味で、パウロ書簡の集大成であるローマ書の修辞学的分析を行なった。

（５）新約聖書のヘレニズム・ユダヤ人キリスト教書簡文学の代表として、ヘブライ書・ヤコブ書をフィロンに見られる修辞学的批評の視点から再評価して分析した。

４．研究成果

（１）背景研究の成果として、ヘレニズム・ローマ期のパイデイアの中で修辞学を位置づけ、その教育の概要を明らかにした。すなわち、ヘレニズム・ローマ期では修辞学はキケロを代表として「自由学芸」（エンキュクリオス・パイデイア）の冠として位置づけられ、それは初等段階では「プロギュムナスマタ」による教育から始まり、高等段階では「模擬討論」に進んでいったことを明らかにした（雑誌論文⑧、学会発表⑧）。

（２）ヘレニズム・ユダヤ教のフィロンのパイデイアと修辞学ならびに哲学の関係を位置づけて、フィロンの聖書解釈における修辞学の用い方を分析し、そのパイデイア・修辞学・哲学の概念を把握した。

第一に、フィロンは、サラを「パイデイア」すなわち聖なる神の言葉に関する「真の哲学」の象徴とし、ハガルを世俗の学問である「エンキュクリオス・パイデイア（自由学芸）」の象徴として用いた。その上で、「侍女」という隠喩を用いて、「哲学」に代表される世俗の学である諸学が、聖なる学である「神学」に仕える仕方で、ヘレニズムとヘブライズムを統合するパイデイア概念を形成した。それは中世思想の根幹をなす概念となった（雑誌論文⑤、学会発表⑥）。

第二に、フィロンの著作は主として寓意的注解書と哲学的著作のグループに分かれるが、前者では冒頭に聖書が引用され、字義的解釈から倫理的解釈を経て寓意的解釈へと三段階で進んでいく。だが、議論の展開の中で二次的テキストが加えられ、聖書以外の引用は見られない。後者ではギリシアの古典が大きな段落の結びに議論の証拠として引用され結論を印象づける。それぞれ、議論の中では「ディアトリベー」や「キアスム」を多用し、その他多様な修辞学的文彩を用いて議論を進める（雑誌論文⑥、学会発表④）。

第三に、フィロンは聖書解釈では、『世界の創造』に典型的に見られるように、ギリシア哲学の影響を受けて聖書を解釈するが、そこではプラトン学派やストア学派の思想を受け入れ、懐疑派や原子論者やエピクロス学派の思想を排除する。それは後のキリスト教神学に決定的な影響を与えていった（雑誌論文①、学会発表②）。

（３）19 世記末から 21 世紀初頭にかけての福音書文学と書簡文学の研究史の潮流を見渡した上で、方法論としての修辞学的批評を位置づけた。すなわち、様式史・編集史などの伝承史的研究の時代は 1970 年代には終焉に達し、1970 年代からは社会学・社会史などの社会科学的研究と修辞学的研究が活発に展開されている。修辞学的批評の台頭は、ある意味では 19 世紀後半までの修辞学的視点での分析の復活を意味し、伝承史的研究を括弧の中に括る。だが、歴史批評学の時代を経た上での修辞学の復活であり、必ずしも過去に遡るのではない。むしろ、古典古代からヘレニズム・ローマ期の教育の中で用いられていた修辞学に習熟することは、福音書文学や書簡文学の著作された時代の表現様式や思考様式に精通し、その構造様式を解明する上で有効な手段である（雑誌論文④、⑦、学会発表③、図書②）。

（４）「ヘレニズム異邦人書簡文学」の代表作であるパウロのローマ書に対して辞学的分析を行ない、ローマ書を含めてパウロ書簡は、ヘレニズム・ローマ期の西洋古典修辞学を用いて一貫して分析できることが明らかになった（雑誌論文⑨、学会発表⑦）。それに基づいて、修辞学的批評の視点で書かれたジュウェットの世界的なローマ書注解書に

対して東京で開催された国際シンポジウムで批判的論文を読んだが、これに対してジュウェット本人がコメントして対論を深めた（学会発表⑤）。

（５）フィロン研究での知見を背景にして、ヘレニズム・ユダヤ人キリスト教文書と位置づけたヘブライ書とヤコブ書の修辞学的分析を行ない、パウロ書簡のように西洋古典の修辞学的分析では解明できない点が分析できることが明らかになった。

ヘブライ書は、五つの説教ブロックに分かれる「書かれた説教」であり、それぞれ原則的として「解釈」の後に「勧め」が続く。説教ブロックの議論では、その根拠としてそれぞれ詩篇 2 編、8 編、95 編、110 編、エレミヤ書 31 章、箴言 3 章を引用して議論を展開する。その議論の中では「ディアトリベー」や「キアスム」が多用され、「比較」「隠喩」その他数多くの修辞学的文彩が用いられる。また、「解釈」と「勧め」が交互に現れるが、それに対応して「演示弁論」の「称賛」と「非難」のスタイルと「助言的弁論（議会弁論）」の「勧奨」と「阻止」のスタイルが交互に交替する（雑誌論文③、学会発表①）。

ヤコブ書は、序論の後の「命題」では第一命題「試練に耐える人は幸いである」と第二命題「行なう人は幸いである」という二つを掲げる。本論では第一に、第一命題を具体化した「富んでいる人」の問題が議論され、第二に「行なう人」の問題に移り、その「行なう人は幸いである」の「行ない」で具体的には「舌と心」での「行ない」が論じられる。「舌」の義論の後に「心」の議論に移り、再び「舌」の議論に戻って「囲い込む」。その後に第一の「富んでいる人」の議論に戻り、こうして第一の議論が第二の議論を「囲い込む」。このようにヤコブ書全体は「上からの知恵を求める」（3:13-18）を中心にして、フィロンの議論に見られるように鏡像的シンメトリー構造をした一つの説教である。その議論の中では「ディアトリベー」「キアスム」「隠喩」を始めとして多様な修辞学的文彩を用い、さらに議論を「例証」する「論拠」として、旧約聖書やＱ文書からの言葉を用いている（雑誌論文②）。

（６）本研究期間中に、これまでの修辞学的批評の視点での研究成果として、1998-2001 年度の科学研究費研究成果を核にして、日本聖書学研究所からの出版助成により『新約聖書と修辞学：ルカ文書とパウロ書簡の修辞学的・文学的研究』（日本聖書学研究所創立 50 周年記念双書、キリスト教図書出版社、2008 年）を出版した。それは以下のように構成されている（図書③）。

＜Ⅰ.プロローグ（研究史と方法論）＞
１．修辞学的批評の潮流：修辞学の国際研究集会を中心にして
２．私にとっての釈義とは：修辞学的批評
＜Ⅱ.パウロ書簡の書簡理論的・修辞学的研究＞
３．コリントの信徒への手紙 2 1-9 章の書簡理論的・修辞学的批評
４．コリントの信徒への手紙 2 10-13 の書簡理論的・修辞学的批評
５．コリントの信徒への手紙 2 10-13 章におけるパウロの論敵
６．書簡理論と修辞学の視点から見たコリントの信徒への手紙 2 1-9 章と 10-13 章の関係
７．修辞学と倫理の視点から見たコリントの信徒への手紙 2 8 章と 9 章の関係
＜Ⅲ.ルカ文書の修辞学的・物語批評的研究
８．使徒言行録のジャンル
９．ルカ福音書の序文と歴史叙述
10．ルカ文書の物語的統一性
11．ルカ文書の演示的スタイル
12．ヘレニズム・ローマ期の歴史叙述理論；ルカ文書の背景として
13．ルカ文書は歴史的モノグラフか？
＜Ⅳ.エピローグ（緒論と歴史的展望）＞
14．使徒言行録：緒論
15．パウロ以後の展開

本書は、『日本の神学』第 48 号（2009 年）pp.113-119、ならびに『新約学研究』第 37 号（2009 年）pp.78-84 で書評された。

（７）本研究期間の最終年度には本研究成果を核にして、『フィロンと新約聖書の修辞学：2007-2010 年度科学研究費基盤研究 C 等成果報告書』（島津印刷、2011 年）を出版した。それには、1999-2001 年度の科学研究費補助金萌芽的研究でやり残したパウロ書簡（ガラテア書・フィリピ書・第一コリント書 1-4 章・ローマ書）の修辞学的批評の 5 論文を第 3 部として追加した。そこではヘレニズム・ローマ時代の修辞学を用いてパウロ書簡の分析を試みているが、「プロギュムナスマタ」「演示弁論」「アイロニー」など修辞学的批評では従来は用いられなかった新しい視点を用いて分析した。また同期間中に行なった学内共同研究の成果もエピローグとして追加した。それは以下のように構成されている（図書①）。

＜プロローグ＞

１．ヘレニズム・ローマ時代のパイデイアと修辞学の教育
＜第１部　フィロン研究＞
２．フィロンにおけるパイデイア
３．フィロンにおける修辞学
４．フィロンにおける哲学
＜第２部　研究史の潮流＞
５．福音書は伝記文学か
６．新約聖書の書簡文学
＜第３部　パウロ書簡の修辞学＞
７．ガラテヤ書の修辞学的分析：プロギュムナスマタの視点から
８．フィリピ書の修辞学的分析：演示弁論の視点から見た文学問題
９．第一コリント書 1-4 章の修辞学的分析：神学議論としてのアイロニー
10. ローマ書の修辞学的分析
11. Is Romans an Ambassadorial Letter?
＜第４部　ヘレニズム・ユダヤ人キリスト教文書の修辞学＞
12. ヘブライ書の修辞学的分析
13. ヤコブ書の修辞学的分析
＜エピローグ＞
14. ヘレニズムとヘブライズムにおける福祉思想の源流

研究期間内に以上を印刷製本して研究者に配布した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 9 件）

①山田耕太「フィロンにおける哲学」『ペディラヴィウム：ヘブライズムとヘレニズム研究紀要』（査読有）、投稿中.
②山田耕太「ヤコブ書の修辞学的分析」『敬和学園大学研究紀要』（査読無）第 20 号（2011 年）、pp. 101-119.
③山田耕太「ヘブライ書の修辞学的分析」『新約学研究』（査読有）第 38 号（2010 年）、pp. 35-52.
④山田耕太「新約聖書の書簡文学」『敬和学園大学研究紀要』（査読無）第 19 号（2010 年）、pp. 115-126.
⑤山田耕太「フィロンにおけるパイデイア」『敬和学園大学研究紀要』（査読無）第 18 号（2009 年）、pp. 223-233.
⑥山田耕太「フィロンにおける修辞学」『新約学研究』（査読有）第 37 号（2009 年）、pp. 5-22
⑦山田耕太「福音書は伝記文学か」佐藤研他編『経験としての聖書：大貫隆教授献呈論文集』（査読無）日本聖書学研究所・リトン社、2009 年、pp. 281-294.
⑧山田耕太「ギリシア・ローマ時代のパイデイアと修辞学の教育」『敬和学園大学研究紀要』（査読無）第 17 号（2008 年）、pp. 217-231.
⑨山田耕太「ローマ書の修辞学的分析」『新約学研究』（査読有）第 36 号（2008 年）、pp. 17-31.

〔学会発表〕（計 8 件）

①山田耕太「ヘブライ書の修辞学的分析」日本新約学会（2009 年 9 月 12 日）国際基督教大学
②山田耕太「フィロンにおける哲学」日本基督教学会（2009 年 8 月 28 日）北海学園大学
③山田耕太「新約聖書の書簡文学」日本基督教学会関東支部会（2009 年 3 月 27 日）聖学院大学
④山田耕太「フィロンにおける修辞学」日本新約学会（2008 年 9 月 12 日）東北学院大学
⑤ Kota Yamada “Is Romans an Ambassadorial Letter?” 日本聖書学研究所シンポジウム “Paul, Romans and Japan”（2008 年 4 月 21 日）日本聖書学研究所
⑥山田耕太「フィロンにおけるパイデイア」日本基督教学会関東支部会（2008 年 3 月 14 日）聖学院大学
⑦山田耕太「ローマ書の修辞学的分析」日本新約学会（2007 年 9 月 26 日）東京神学大学
⑧山田耕太「ギリシア・ローマ時代のパイデイアと修辞学の教育」日本キリスト教教育学会（2007 年 6 月 30 日）沖縄キリスト教大学

〔図書〕（計 3 件）

①山田耕太『フィロンと新約聖書の修辞学：2007-2010 年度科学研究費基盤研究 C 等成果報告書』島津印刷（2011 年）、pp. 1-209.
②山田耕太「福音書は伝記文学か？」佐藤研他編『経験としての聖書：大貫隆教授献呈論文集』日本聖書学研究所・リトン社（2009 年）pp. 281-294
③山田耕太『新約聖書と修辞学：パウロ書簡とルカ文書の修辞学的・文学的研究』キリスト教図書出版社（2008 年）、pp. 1-421.

〔その他〕

ホームページ等
http://www.keiwa-c.ac.jp

６．研究組織（1 人）
(1)研究代表者
山田 耕太（YAMADA KOTA）
敬和学園大学・人文学部・教授
研究者番号：50240015